

三商レポート

第二話 「お金の話し」 (株) 三商 内藤 雄

“借金”という言葉からは、「暗い・怖い・しない方がいい」というイメージがあります。ところが、“ローン・クレジット・キャッシング・ファイナンス”というカタカナ文字になると、実態は同じ借金なのに、なぜか軽いノリで気軽に利用してしまいます。「リボ払いで(*)」などと言うと、むしろオシャレにさえ感じてしまいます。

物があふれ何でも手に入る時代です。若い人は「欲しい」と思ったらまず手に入れます。カード1枚あれば可能な時代です。「支払い？何とかなるだろう。足りなければ無人機で借りればいいさ。いざとなったら親が何とかしてくれるよ。だって周りの友達もそうだもの。」現に親が何とかしてしまうのです。それを見越して金融業者は若者にどんどんお金を貸しています。

テレビのコマーシャルでおなじみの大手消費者金融には、膨大なデータがあります。その分析から導かれた答えの一つに「親元で暮らす若者に焦げつきは少ない」というデータがあるのです。

大手消費者金融のこうした膨大なデータと絶大なノウハウを狙って、大銀行が大手消費者金融と手を組みました。今後、信販やクレジット会社と提携やグループ化により、個人向け消費者金融に一層力を入れます。

“銀行”の安心感を前面に出しながら、まだ借金に染まっていない若者を顧客として狙います。与信と回収の業務はすべて大手消費者金融が引き受け保証します。銀行で借りたつもりが、もし返せなければ消費者金融の訓練されたプロの回収員が取立に来ます。銀行も消費者金融会社も生き残りをかけ収益向上の戦略に出ています。若者が新たな多重債務者となる第一歩にならないといいと思います。

では、その若者はいかに自分を守ったらいいのでしょうか。自己責任が言われる時代です。このことの学校での教育は遅れています。親に借金の肩代わりをしてもらっても、自己破産しても、借金体質が治らなければまた繰り返します。大切なのは金銭感覚です。お金のありがたさとお金の怖さを知ることです。そして、利息をつけて返すことの大変さを知ることです。

誰でも「欲しい」と思うのは同じです。そんな時、ちょっとがまんする→計画をたてる→貯金をする→足りなければ親に協力を求める→やっとなんか手に入れる→うれしい・大切に作る・感謝する。こうしたことが子供の頃から自然と身につけていたらいいと思います。ちょっと古くさい考え方もかもしれません。でも、貸す側のあの手この手の新戦略に振り回されないようにするには、少し古くさ

い方がいいのです。

そして、何よりお金の話を家庭の日常生活の中で、親子で（実は夫婦でも）できるといいと思います。タブー視しないことです。昔は「子供がお金のお話をするものじゃない」と親に叱られました。しかし、今は親子でお金のお話をするべき時代です。お金の話を通じて、世の中のこと、将来のこと、生き方などを語りあうといいと思います。お金での失敗を防ぐには、まず家庭で金銭感覚を身につけること（金銭教育）がますます重要になってきていると感じます。

- * リボ払い：リボルビング払いの略 一定の与信枠の範囲内で自由に反復借入れでき、返済については一定の最低支払額でよいというローンの返済方法。分割払いに比べ、長く利息を払うこととなります。

(2004年7月15日)